衝海町

（つくみまち）——受賞作品概要

神盛敬一

小説は主人公、僕が家族とともに、ミシリミシリと音のするアパートから父が就職した鉄工所がある町、衝海町へ引っ越しするところから始まる。オート三輪の助手席に父が、荷台には母と妹と僕が乗った。僕はこの春、中学三年生になる。ボロアパートの人々は母とうまくいっていなかった坂本さん始めみんなで僕たち家族を見送ってくれた。

僕は生まれてから随分知らない町を見てきた。

父の会社が倒産して二年になる。父は有限会社　萩原護謨工業所の社長で神戸長田の地場産業の、ゴム関係の事業をしていた。そのときの引っ越しはリヤカーに荷物を積んでみんなで歩いていった。僕が小学六年生でまだ一歳だった妹結子は母の背中に負われていた。

引っ越しの前、次から次にいろいろな人が家に出入りして、家具も電気製品もあらゆるものを持ち帰った。母は放心したようにただそれを見ていたように思う。僕はこの人たちに家族もばらばらにされてどこかに連れされるような予感がしていた。僕は父を尊敬していたが、そうなった場合は父を捨てても母と結子はどんなことがあっても守ってみせると覚悟をしていた。

母は父を慰めながら、リヤカーの綱を引いた。そのとき僕は家族が壊れないのだと思った。それから父の知り合い、間借り、倉庫の片隅、そしてボロアパートと神戸市内を転々とした。倒産して二年、再起を期していた父がなぜこの鉄工所に就職したか定かでない。母の「次のことを考えよう」の言葉はとても前向きに聞こえたが、父はなぜか憮然としていた。

僕は身体が大きく落ち着いて見えたから、学校でも一目置かれていたが、内心は根性も自信もなかった。しかし、知らない町の新しい学校をいろいろ体験するうちに調子に乗らない、貧乏でも貧乏人の顔をしない、何ごとにも積極的にならず、目立たずこぼれず普通の子でいれば、新しい環境が勝手に受け入れてくれることを悟った。

今度引っ越す「つくみまち」という町は、言葉の響きがいい。何かしら、新しいことが起こりそうな気がした。

やがてオート三輪が鋳物で造られた重厚な欄干の石橋を渡ると、運河の岸に煉瓦倉庫が並んでいた。

オート三輪は、道が行き止まりのような木の門がある鉄工所の前で止まった。正面にガスタンクが黒く大きく見える。父は服装を整えながら事務所にあいさつに行った。僕が溶接の火花が散る雑然とした鉄工所を眺めていると、父と前後して女性事務員が出てきて道を教えているようだった。

オート三輪は少しバックして路地に入った。「ここや」父の声にオート三輪は鉄工所の裏手で止まったらしい。

幅二メートルほどの路地から小さな男の子が走り出てきて、見知らぬ者だという表情で見つめた。

事務員が工場への入り口や炊事場の奥に独身寮があることなど、路地奥の建物を案内してくれて、

「お住まいはこちらになります」

と続けてガラス障子を開けると、かべの木目が鮮やかな部屋が現れた。その六畳間が家族四人の新しい住まいだった。父が就職した鉄工所は造船ブーム乗って景気がいいという。母も従業員寮の賄い婦となった。衝海町は海に突き当たったところという意味だが、海は見えなかった。越してきたときから気になっていた、盛り上がった地道の先は向こう岸まで二十メートルほどの澱んだ新川と呼ばれる川だった。車一台が通れる幅は狭いが長く見える衝海橋が架かっていた。

この橋は新川に架かる最後の橋らしく河口を塞ぐように堤防が横たわっている。その堤防の向こうが海のようだ。白い灯台が海の存在を教えていた。川の向こうには黒い大きな石塀に囲まれた都市ガスタンクが聳えていた。

「萩原くん、何してんのん？」驚いて振りかえると、ここへ来て初めて学校へ行ったとき、きれいな人と思った同じクラスの西畑美子だった。彼女が僕の家を鉄工所と誤解しそうだったので、両親がこの住み込みで働いていると告げた。後ろに束ねた長い髪が身体を動かすたびに背中でころがり、赤いセーターに白いブラウスの襟が大きい目と色白に似合って、教室で見るよりもきれいだった。僕は西畑美子がどんな家の子なのかと思い、何でもない仕草がかわいい子だ、憧れの気持ちが募った。

鉄工所の社長はケチで通っているらしい。何か気がつくと誰かれなしにどなる、という社長の陰口を聞いた。母は賄い費が足りないときは工場の散らばっているスクラップを売って充てろと言われているらしいが、「そういうケチが会社を守ってるんよ」と倒産を経験している母は噂と違った見方をしていた。

社長が不意に僕たち家族の部屋を訪れ、「六畳一間は狭いな」と眺め、「君の部屋は考える」と言って立ち去った。社長を初めて間近で見たが、白髪頭の前髪を後ろにやってオスのライオンのようだった。

工場はどんどん拡張されていった。

梅雨があけたころ社長は再び現れて、僕を三畳敷の真新しい部屋に案内して、

「ここが君の部屋や、早く移って来い」

と社長は機嫌のいい表情で僕の肩を軽くたたいた。

僕は、夏休みになったその日にその屋根裏部屋へ引っ越した。中学二年生の時、

賞をもらった水彩画を部屋の壁に飾った。社長の言いつけで、机と椅子は事務所のお古を事務員の岡部さんが汚れを拭いてくれて、椅子も部屋まで運んでくれた。

社長が戻ってきて、「誰も部屋に招いてはいかん」と言い、また絵を見て、「広々とした空がいい」と言い残すと僕と岡部さんを二人っきりにして出て行った。

母は前のアパートのときもお高くとまっていると言われたが、衝海町に来てからも周囲にとけ込めない風だった。しかし、寮の人には、「お母ちゃん」と呼ばれて世話をしている。母の真実がどれなのか、僕は戸惑っている。

衝海町の表通りにはちゃんとした喫茶店もあったが、めし屋も八百屋もバラック建てで、さらに路地に入ると、粗末な住宅が密集していた。母は「何かが臭う」と言い、この町に馴染めないようだった。寮の入り口の木戸の直ぐ近くの家が浅田さんの家で、引っ越しのとき、走り出てきたあの四歳ぐらいの坊主がいた。彼はときどきひとりぽっちで木戸に何かをぶつけて遊んでいた。浅田さんはきれいな人だ。年上の魅力を感じていたが、それは西畑美子を思う気持ちと違うものだった。鉄工所の旋盤工場と浅田さんの家の間の路地は母が買い物に出かける通り道だ。浅田さんの坊主が散らかすので、そのことで母と大きなお腹を抱えた浅田さんはちょっとした心の行き違いがあったようだ。鉄工所の塀についた汚れを拭いていた私は、ふと、きつい陽射しに夏服の浅田さんの下半身が影絵のように透き通るのを見た。その影に僕の性器は硬く大きくなった。

数日後、浅田さんは木戸の外の塀のところで産気づいていた。僕は母を呼び、母は父へも湯沸かしなど的確な指示をした。僕と母は浅田さんを部屋まで運ぼうとした。僕の手は浅田さんの乳房にふれ、僕は動揺し、手をはなしてしまい、母の叱責にあう。僕は浅田さんの乳房を感じながら、腰を引いても触れてしまう下半身は緊急事態なのに勃起し、たまらず射精してしまう。女性を実際に意識した、夢精以外初めての射精だった。僕はこんな時に射精してしまったことを浅田さんに悟られていないか気がかりだった。母の矢継ぎ早の指示で、僕は濡れた股間の気持ち悪さを隠して産婆を呼びいく。

浅田さんは無事女の子を出産した。あの日以来、浅田さんは母を「姉さん」と呼んで、嫌いなはずなのに出入りしている。母も裏の奥さんから「浅田さん」と呼ぶようになった。ある夕方、母が寮に行っているときに浅田さんが来た。私は浅田さんの胸元と甘い匂いに勃起した。

二学期の始業日、クラスで席換えがあった。男女一組で、相手は自由という条件だった。「萩原くん、いっしょに並ぼっ」と西畑がカバンを運んできて言った。僕と西畑は微笑合って席を並べた。学校が終わると、初めて示し合わせて西畑と一緒に帰った。

「私、あのとき心臓が止まりそうなくらいの勇気で、萩原君の席まで行ったんよ」西畑は自分の気持ちを言い、僕も同じ気持ちだった。

いつの間にか衝海橋まで来ていた。

「事務所の横に階段があるやろ、あの階段を上がったとこの窓が僕の部屋や」僕がいつもいるところを知ってもらいたくて言った。

「西畑の家もこの辺やろ」と西畑の顔を覗き込んで訊いたが、西畑は黙ったまま川面に目をやった。実は僕は西畑の家を知っていた。かつて浅田さんの坊主を捜して路地奥に行ったとき、西畑を見かけた。そこはミシリミシリのアパートに似たバラックの密集する路地だった。西畑は僕の質問に応えなかった。きっと家を教えたくないのだと思った。橋の上で二人は高校進学について話し合ったが、僕も経済的にも難しいことは分かっていたし、進学したいが、「一応はな、分からん」と応え、「そう、私は行かしてもらわれへんわ。貧乏やもん」と西畑は言った。

十月に入ってまた三者面談があるという。西門で待っていた西畑と帰宅する途中で進学の話題が出た。僕は西畑にはまだ話していないが、進学しないと決めていた。「いっしょに高校へ行きたい」と西畑は進学が無理なのか落ち込んだ表情で言う。

衝海橋までくると、

「衝海島へ行ってみいひん？」

と西畑は何かを決心したように僕を見つめた。

十分後に再度落ち合って自転車で二人は衝海島へいった。

道は途切れて砂利浜になった。波打ち際に、原型をとどめないほど崩れた防波堤が転がっていて波に洗われている。清潔に思う西畑に、ちょっと身体に触れられるだけで僕の身体は反応した。帰りの自転車に乗った美子は、来るときは遠慮がちに摑んだベルトを、最初からしっかりと指を深く差し込んで摑んだ。今までより心が通じ合った気がした。

十日後の進学三者面談で、美子は彼女の母が粘って父を説得して進学と決まり、母が来なかった僕はまだ決めかねていた。前の面談で母が言ったこと、「この子が決めること」は嬉しくもあったが、僕の心に妙な影を落とした。父は進路を決めかねている僕に悪いのは自分だと謝った。本当は事業を再興したかったが、母は待ちきれなかったという。借金も早く返したい、と母はがんばっている。でも男は女には理解できんことがあるんや、我が道を行け、と励ましてくれた。

春、僕は、中途半端な就職はするな、という母の意見に従って自動車修理の小さな店でアルバイトをして定時制高校へ、美子は全日制高校に進学していた。

日曜日、衝海橋で美子に会った。

「祐ちゃんと同じ高校、行きたかったな」美子は会う度に同じことを言う。日頃二人は連絡の取りようもなく、会った日に次に会える日を約束しておくしかなかった。しかし高校生活は忙しく、互いに自由はきかない。次に会える日を何度も話し合ったのに決まらない。

アルバイトの自動車修理工場はかなり資金繰りに困っているらしく、僕に合う仕事がない場合は午後から帰っていいと言われた。鉄工所に帰って定時制高校へ行くまで時間があったので家族の部屋に行く途中、社長に会った。「昼間から何しとる？」と社長は怒鳴り、唐突に周辺

の雑然と置かれたパイプやフランジを、スキットに乗せて隅に寄せろ、と言いつけられた。その後も社長室に呼び出され、次の仕事をいいつけられたので、「困ります」と言ったら、「ワシのいうことを断る？」といきなり机を叩く。「やってもらわな困る」と社長は口を振るわせ、雨の中を工場の方へ歩いていく。僕はこの仕事は性に合わないと思った。

今朝、鉄工所の前で偶然のように夏の制服に変わった美子に会った。五時に会う約束をした。

会うと、「学校、さぼったん？」と美子は訊いた。昨日もその前も、自転車が階段の下にあった、休みのはずがないのに、とその理由を聞きたがった。二人は自転車に相乗りして別に行くあてもなく走り、マッチ工場の広場に出た。また、「何で学校さぼったん？」と美子は訊いてきた。さぼっているとか、学校を辞めようかと迷っているなどとは言えず、雨が降りそうだったので、電車で行った、と出まかせの嘘をついた。

「あんたの部屋、見てみたいな」と美子は言った。

「見るほどの部屋やない」

「見てみたいもん」美子はそっと言って、それから黙ってしまった。鉄工所は定時の五時に終わったらしく大門は閉まっていた。他人を部屋に招いてはいけないという社長の言葉が蘇る。

部屋に入ると、ええ部屋やん、と言って僕の描いた水彩画に見入った。美子が僕の部屋にいることは、机しか置いていない殺風景な部屋がバラで埋め尽くされたように思えた。美子は僕の机に座り、定時制のクラブ活動を訊いてきたが、あるが、入っていないと応えた。美子も何もやっていないと言った後、

「私はテニスをやりたい」とはにかみながら静かに言った。しかし授業料以外は親に言えないと、淋しげに笑った。お尻を半分ずつずらして、わざと一つの椅子に二人でかけた。美子は「落ちそう」と笑い、僕の腕を両手で抱くように摑んだ。僕は何か喋らなくては、と焦ったが、美子の顔があまり近くにありすぎて言葉が出なかった。ふざけたつもりなのに身体が堅くなる。美子とくっついた身体半分が汗ばんだが、少しも気持ちが悪いと思わなかった。

「僕なあ、お前の言う通り学校さぼってたんや」と告白した。そして他に今抱えている悩みをすらすらと話した。

どちらも黙ったまま一つの椅子に腰掛けて、薄暗くなっていく窓の外を見ていた。

美子の腕を振りほどいて立ち上がると、「他の男の子、もっと厚かましいで」と美子は言ったが僕はその意味がよく分からなかった。階段を降りる途中で、「友だちが言ってた。男の子は二人っきりになったら絶対キスするって」美子は言った。僕は「帰るぞ」と言って階段を降りて行った。

もうすぐ夏休みに入る。僕が学校から母たちのところに寄らず、部屋に戻った。

次の朝、母に空の弁当を渡すと、社長が夏休みなったら仕事を手伝えと言っていたと、母は言った。

「断ってくれたらよかったのに」と僕。

「断るの難しいな。社長さん、あんたに力を入れてるみたいな話をしてたから。嫌やったら自分で話してよ」

と母。母にとって「この子が決めることです」と同じように自分に都合のよい言葉で喋った。

「祐樹、まさかと思うけど、女の子を部屋に呼んだりしなかったやろね」と母が訊いてきた。借りっぱなしにしていた参考書を取りに来ただけ、とあらかじめ考えていた嘘の理由でその場を繕ったが、母と言い合いになった。

「何でも自分で決めたらええんやろ！」

僕がはじめて言ってしまった捨て台詞だった。母は後ろを向いて、「ククッ」と泣きだした。そのまま、裏木戸から外へ出ると、浅田さんが出てきて、「見たわよ、セーラー服の女の子」とか、「祐樹さんも彼女ができる年ごろやもんね。嫉妬するなあ」とか冷やかしの表情で顔を覗き込んだ。

部屋に帰らず、事務所を素通りして衝海橋に来てしまった。ここは美子と二人だけの場所なのに頭の中は母と浅田さんのことが交互に占領した。美子が大好きなのに、初めて性の刺激を受けた浅田さんのことが忘れられない。浅田さんが「嫉妬する」と言った言葉が、僕の心に突き刺さっている。

その後、美子と会えない以外、他に何も変わらない日が続いた。風呂場の掃除を兼ねて風呂に入り、食堂に帰りかけると、浅田さんが声を押し殺して泣いているのが聞こえた。そして「自分で決めろ」という僕に対するのと同じように、浅田さんの夫の浮気への対応を、「あんた次第」と言っている母の声も聞こえた。

事務員岡部さんが、社長が僕を呼んでいると、伝えに来た。直ぐ事務所へ行ったが、社長は職人と打ち合わせ中でしばらく待たされた。社長の要件は、僕が鉄工所に入って、現場を動かす仕事をやってほしいということだった。僕は機械の技術者になりたいと伝えたが、無視された。

「考えさせてください」と僕は言い、深々と頭を下げた。「まあ、両親とよう相談したらええ」と社長は背筋を伸ばして言ったが、僕は心の中で「自分で決めることです」と言った。

アルバイトを辞めることを自動車修理店に断りに行った。仕事が立て込んでいたらしく、ろくに口も聞いてもらえず、淋しいものがあった。去られる側は、仲間意識が裏切り者に見えてしまうのか、辞めると言った瞬間によそよそしくなったように思う。僕はアルバイト先にかけた不義理や部屋を作ってくれた社長への恩義などが重く僕の心にのしかかってきた。

ふらふらと自転車を漕いでいると、いつの間にか衝海橋の近くまで帰って来ていた。

美子に会ったのは、まだ梅雨があけていなかったころだ。会いたくても家を訪ねる勇気がないのではなく、家を訪ねれば粗末な家を知られて美子が傷つくと思ったから。会えば、それだけ慰められるのに。

橋の危ない端っこに立っているのは浅田さんだった。「そこは危ない！」と僕は叫んで、自転車を投げ出して、浅田さ

んと坊主をつかまえた。
「助けてくれたのね」という浅田さんの言葉に「やっぱり」と思った。
「今朝、恥ずかしいところを見られてしまったわ。およそわかるでしょ、姉さんは離婚しろって言うし。私を祐樹さんの部屋においてもらえる？」
僕はもう駄目だと思った。乳房に触れたことも、下半身に硬い性器を押し付けたことも浅田さんは知っているから、こんなことを言えるのだ。僕の困った顔に、「ウソ、冗談よ、祐樹さん、可愛いから意地悪したくなっただけ、離婚しないわ」と。
アルバイトを辞めたことは、僕が大人の重圧に負けて、社長の言うとおりになることだった。そして僕は情けない気持ちでいた。それを母は知らない。
お盆前日は夏休み最後の登校日だった。その通い慣れた道の鋳物で造った欄干の橋で、胸にラケットを抱いた美子とテニス部らしい男子とが楽しげに道の向こう側をすれ違っていく。神経が尖って、美子と男子が並んで行った姿が、胸を突き刺すように痛く焼きついて消えない。市電が橋を渡って追い抜いてゆく。そこは色も音もない。僕はただ自転車を漕いで、止めるということさえ忘れて走っていた。
ミシリミシリのアパートのずっと先の夏草が茂る広場に自転車を止めると、涙がいっぱい溢れてきた。学校へ行きたくない、家にも帰りたくない、電車通りに背を向けて、僕はしばらく佇んだ。
僕は失恋したのだ。
しばらく会っていない間に、美子は一歩踏み出して、テニスができる人に憧れたのだ。
自転車は橋からの坂を転がるように静かに走った。そして突然、デコボコ道で激しく揺れた。正面に夕日がまぶしく、ガスタンクが橙色の霞に包まれるように見える。デコボコの地道が、僕の心に色をもどしてくれた。
このわずか三百メートルほどのデコボコ道で僕は多くのことを考えた。目立たずこぼれず普通の子、それは転校生が見つけた生き方だった。しかし、それを変えて有頂天になる幸せを教えてくれたのは美子だ。彼女を想うと心は切なくゆらゆら揺れる。
いつの間にか衝海橋の真ん中に立っていた。橋の向こうにデコボコ道が続いている。この道は衝海町を真っ直ぐ貫いて、市電筋と交わる。衝海町はどこにも突き当たっていない。
僕は将来、機械技術者になりたい夢はしっかり持っている。もう少しこのまま辛抱して、高校を卒業したら自分で決めた道に勝負をかけよう、僕を変えてくれた美子の思い出がいっぱいの、衝海橋の上でそう誓った。
鉄工所へ帰ると、母は僕を待っていた。
「お腹が空いたやろ」
母は急いで夕ご飯の用意に取りかかり、「待っとりよ、すぐやからな」と声が弾んだ。
「こんばんは、姉さんいるう」
ああ、まだ浅田さんが付きまとってる。僕は逃げようとして一度立ち上がったが、座り直した。

（抄・野元　正）